

(劇突 2024 自主公演の劇評)

■浪漫座公演 「翔んで浜松」(なゆた浜北ホール、12月15日11時の回)

全体として TV のバラエティでも見ているような舞台だった。劇作品としての評価をすべきものなのか、戸惑ったのが正直なところ。静岡県のとある学園の浜松校、静岡校、さらには伊豆校と、東中西に分かれてのプレゼン大会予選が行われる。グループを横断する掃除のおばさんなんかも出てきて、それなりのストーリー展開を予感させたが、ドラマの方向には話が行かず、地域自慢の競い合いのバラエティのようなものに終着してしまった。おそらくそれが目的の舞台なので(途中くらいからそうなんだなとわかる)それに対して何だかんだいいうのはおこがましいわけだが、ショーのステージかぁ・うーん・というのが率直な感想。ゲストの二つのダンスグループは見映えもし、見ごたえがあった。観客が参画する場面も悪くはなかったと思うのだが……。劇としてももう少し社会風刺を利かすとか、あったらよかったのに、と思った。演技陣では阿部美幸さんが群を抜いていた。

■FOXWORKS 公演 「マジシャンズ・ワース」 (12月8日11時半の回、Uホール)

マジシャンたちの存在の有無をからめたミステリー仕立てのエンターテイメント。6人のマジシャンが集められ「D」なる黒幕?との駆け引き(銀の鍵を見つけること)に臨む。ここにはマジシャン同士の駆け引きや思惑が次々絡む。マジックを披露する場面、観客が参加する場面などもあり、演出的な工夫?も散りばめられているが、物語の太い筋にもう一つ結びついていかなかった。観客(さくら?)が推理に挑むチャレンジタイムなるものが必要だったのか疑問が残った。謎解きとしては、入れ子構造になっており、ある一人のマジシャン(老人)が6人を演じていて、戸籍制度の関係からその6人が消えた(消した)、という仕立てが最後に明かされる。アイデアは面白いと思ったが、その分、中身の6人の話はマジックと疑心暗鬼ばかりで、個々のプライベートの物語は設定以上に展開されない。やむを得ず並列に扱われる。そのあたりドラマとして惜しい感じがした(大部分の時間が6人に費やされるので)。老人と赤瀬川の場面を中間にもう一回追加するとかすれば、比重がいい具合になったかもしれない。映像も随時使用されていたが、リアルタイムの映像に見せかけつつ、実際にはそうではないため、都度違和感を感じた。スタッフワークでは館内のセット(美術・池谷雅之)が印象に残った。

■劇団からっかぜ公演「切り子たちの秋」 (12月1日、Uホール)

時代の流れの中で経営が厳しくなりつつある町工場が舞台。家を継ぐ娘を中心に三世代(祖母-母-孫)にわたる家族の絆や工場をめぐる人間模様を描く。時代の中で翻弄される職人らの生きざまも映し出される(ふたくちつよし・作、布施佑一郎・演出)。それぞれの人生を歩む家族ひとりひとり、そして工場の従業員、その等身大の姿が十二分に演じられていた。来し方を振り返りつつお互いを吐露し合う「親族会議」ともいべき終盤のシーンは深く心に残るものだった。リアリズムに根差した新劇系の芝居、この劇団の自家薬籠中の類と言えばそれに尽きるが、今年はさらに各役、各場面を手のうちに入れ、さらなる作り込みができたふうに見えた(ユーモアを醸し出す行間などは自信と余裕の中で生まれてくるものだろう)。一定のレベルをクリアした演技陣の層は厚く、どの作品にも対応は可能だろうが、自分たちが作るにぴったりの作品を選んで出してくる。その劇団の眼力のようなものがすごいなといつも思われる。演出面で二点ほど。工場の音響効果が数度使われたと思うが、ピンポイントでなく背景で少し長めに聞かせてもよいような気がした。消えものに関して。現物を出さない方針と察せられるが、りんご等、小道具として製作してもよかったのでは(手間はかかるが)。今年度の「劇突」参加作品の中では、全体として一番完成度が高く、一番推したい舞台であった。

■ムナボケ公演「紙。」 (11月17日14時の回、クリエート浜松)

いつもながらの刺激のかつ挑戦的な舞台。ユヴァル・ノア・ハラリの「サピエンス全史」を参考にしたという。経済、政治、宗教、戦争・・・という具合に小テーマを繰り返す構成にそのあたりうかがえるが、「全史」を消化吸収するには登る山がいくぶん高過ぎたかもしれない。ほぼ全編アンサンブル仕立てになっており、演者らの戯画的アクションは面白く観た。奇数/偶数、見える/見えない等の二者対立を軸に話は進み、メインの二人の、細くか弱いつながりに二者対立を超えるメッセージ(反戦争)を読み取ることはできたが、ストーリーのプロセスが太くない分、観念的な域に留まった感じもした。ただ、「手紙」が「手」と「紙」に破壊される(と私は解した)終幕は痛切な悲劇として心にしみた。演出の永井宏明氏はアフタートークで舞台上の「不安定」要素に言及されていた。共感を覚えつつもどこでバランスをとるかは難しい問題とも感じた。例えば今回観客が紙飛行機を飛ばして作品(演出)に参画する場があり、それ自体はユニークな試みと思ったが、その時「語り手」が説く「認識の共有」がもう一つ腑に落ちなかった。タイミングも含め、演出の真の狙いはどういうところにあったのだろうか(にぎやかし?不安定化?)。紙飛行機(戦争の具)とサピエンスの認知革命(虚構と文明、集団性)をもっとうまく結びつける何かがあればと思った次第。ステージを統一した衣装と紙の白、背景に流れるリズムミクな音楽、照明で区切ったセンタースクエア、作家やAIの登場による自己批評など、全体としてはスリリングで濃密な演出が際立つオリジナリティあふれる舞台であった。高く評価したい。